『万葉集』から見る日本の古典 28

獨協大学特任教授　城崎　陽子

天武・持統朝 ―その5―

先回は天武・持統両朝にわたって律令国家体制が固められていく過程で生み出された「天皇即神思想」について触れた。今回は天武天皇の遺業を継いで持統天皇が完成させた事柄の中でも、都城について記しておきたい。

持統天皇の即位が契機となって、新都の建設が具体化する。藤原京の造営である。これまで文献資料の検討と発掘の成果から、建設計画はすでに天武天皇の時代にできていて、その末年には工事に着手していたことが明らかにされている。しかし、天武天皇の崩御によって工事は一時中止となったらしく、持統天皇の即位を機に再開されるのである。

時間を追って造営、遷都までを簡単にまとめておく。まず、持統天皇四年（六九〇）十月、太政大臣の高市皇子が藤原の宮地を視察する。また、十二月には天皇自身による宮地の視察があり、以後造営は本格化していく。翌年の五年（六九一）十月には、藤原京の地鎮祭が行われ、十二月には、身分や家族の構成に応じて与えられる宅地の配分が定められた。また、六年（六九二）五月には宮地の地鎮祭があり、以後おりにふれて天皇の宮地の視察がくり返されるなか、持統天皇八年（六九四）十二月に遷都する。以後藤原京は、元明天皇が和銅三年（七一〇）に平城京に遷都するまで、持統天皇・文武天皇・元明天皇の三代にわたる都として機能することになる。都城造営に関わる『万葉集』の作品を見てみたい。

藤原宮の役民が作る歌

やすみしし　我が大君　高照らす　日の皇子　荒たへの　藤原が上に　食す国を　見したまはむと　みあらかは　高知らさむと　神ながら　思ほすなへに　天地も　依りてあれこそ　石走る　近江の国の　衣手の　田上山の　真木さく　檜のつまでを　もののふの　八十宇治川に　玉藻なす　浮かべ流せれ　そを取ると　騒く御民も　家忘れ　身もたなしらず　鴨じもの　水に浮き居て　我が造る　日の御門に　知らぬ国　よし巨勢道より　我が国は　常世にならむ　図負へる　奇しき亀も　新た代と　泉の川に　持ち越せる　真木のつまでを　百足らず　筏に作り　のぼすらむ　いそはく見れば　神からならし

（巻一・五〇番歌）

右、日本紀に曰く、「朱鳥七年癸巳の秋八月、藤原の宮地に幸す。八年甲午の春正月、藤原宮に幸す。冬十二月、庚戌の朔の乙卯に、藤原宮に遷居らす」といふ。

「役民」とは、租税の一種として無償労働に挑発された民衆のことを指す。荒涼たる原野であった「藤原」の地に新都を造営するため、近江の田上山から切り出した木材を宇治川に流す。その川中の木材にとりついて、一心不乱にはたらく役民を描き、そうした一連の作業が、瑞祥である「図負へる奇しき亀」を現出させ、これを以て神の御心に沿う証だと詠う当該歌は、まさに宮都を造営する際の歌である。そして、次の歌は、藤原宮に遷居してさぶれた明日香の宮を志貴皇子が詠んだ歌である。明日香宮より藤原宮に遷居りし後に、志貴皇子の作らす歌

采女の袖吹き返す明日香風　京を遠み　いたづらに吹く

（巻一・五一番歌）

采女の袖を軽やかに翻していた明日香風は、今はもう都が遠くなったので、虚しく吹いている事であると詠う。

藤原京は、中国・周の都城を学んで建設された、わが国最初の本格的な都城である。都城は構造上「宮」と「京」とからなり、藤原京の場合、宮には天皇が住む内裏のほか、政務にかかわる大極殿や朝堂院、各官司の建物が設けられ、京城には官人や庶民が居住した。

京域は朱雀大路を中心にして左京と右京に分けられ、それぞれ東西に通じる大路と南北に走る大路によって、碁盤の目のように土地が区画された。それらの大路は、東西の場合は南北に「条」の単位で、南北の場合は東西に「坊」の単位で数えられ、大路によって囲まれた一区画も「坊」と呼ばれた。

こうした土地の区画は条坊制と呼ばれ、旧来の説では、藤原京は、大和盆地の古道である横大路・中つ道・下つ道・阿倍山田の道をそれぞれ北・東・西・南の京極とし、左京・右京各四坊、南北十二条の条坊制の都城とみられていた。これによると、京域は東西二・一キロメートル、南北三・二キロメートルで、平城京の約三分の二の大きさとなるが、その後の発掘で、東西についてはおよそ五・三キロメートル、南北についても確認されるところでは四・八キロメートルに及ぶことが明らかにされ、大和三山を京域に取り込み、平城京をしのぐ大きさだったかと推定されるに至っている。

藤原宮跡

一方、藤原の宮は藤原京の中央部に位置し、約一キロメートル四方で、周囲には茅葺きの大垣がめぐらされていた。宮の中心をなす大極殿は、当時最大の建物であり、朝堂院とともに瓦で葺かれ、奈良県橿原市高殿町鴨公の地に建つていた。ここは大和三山に囲まれた一郭で、東に香具山、西に畝傍山、北に耳成山を望むことができた。

また、左京・右京にはそれぞれ官立の寺院として大官大寺と薬師寺が建てられていた。大極殿はじめ、それらの建物は朝廷の威信を示すのに十分であり、藤原京の誕生は、天武天皇がめざした律令国家の完成と新たな時代の訪れとを実感させるものであった。なお、新都の完成をだれよりも望みつつ亡くなった天武天皇の檜隈大内陵（のちに持統天皇を合葬）は、北に広がる新都を見守るかのように、藤原京の中心線の南の延長上に造営されている。

次の歌は、遷都した宮都を讃美する歌である。「藤井が原」に建てられた宮都は、東に香具山、西に畝傍山、北に耳成山と、大和三山を擁する宮都である。そして、南はるか吉野を望むことが詠われ、そうした四囲から収斂された視点の中に聖なる井戸があるのである。その水は、「御井の清水」と呼ばれ、短歌には、この御井に奉仕する乙女たちへのあこがれが詠われている。

藤原宮の御井の歌

やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子　荒たへの　藤井が原に　大御門　始めたまひて　埴安の　堤の上に　あり立たし　見したまへば　大和の　青香具山は　日の経の　大き御門に　春山と　しみさびたてり　畝傍の　この瑞山は　日の緯の　大き御門に　瑞山と　山さびいます　耳梨の　青菅山は　背面の　大き御門に　宜しなへ　神さびたてり　名ぐはしき　吉野の山は　影面の　大き御門ゆ　雲居にそ　遠くありける　高知るや　天の御陰　天知るや　日の御陰の水　こそば　常にあらめ　御井の清水

（巻一・五二番歌）

短歌

藤原の　大宮仕へ　生れつくや　娘子がともは　ともしきろかも

（巻一・五三番歌）

右の歌、作者未詳なり。

このように讃美された藤原宮ではあるが、わずか一六年という短い期間でその役目を終える。理由は明らかではないが、平城京以下の都城がベースとした都城計画とは異なる都城計画によって建てられた都であったことが大きな原因であったようである。